



グランシップマガジン
[ジー] vol.23

GRANSHIP magazine
SUMMER 2004

SPECIAL - 1
グランシップ2004
夏!スペシャル

次代を創る顔

映画監督 豊島 圭介

しずおかアーティスト・リレー

アーティスト 寺田 高士

SPECIAL - 2

何必館・京都現代美術館所蔵

「世界写真家シリーズ」開催記念対談

グランシップ館長

何必館・京都現代美術館館長

山本 肇 対談 梶川芳友

SERIES わが羅針 第23回

深瀬 サキ

村松友視の文化漫遊9

SPECIAL
1

グランシップ 2004 夏! スペシャル

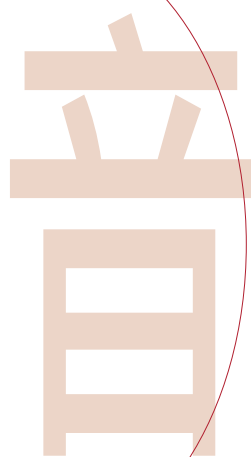
夏だから、沸き立つものがある。
夏だから、その壁を超えられる。
そして、いよいよ2004年、
グランシップの夏がある。



撮影協力 / 静岡県立修善寺工業高等学校

★ グランシップマガジン—4

「音」をカラダ中で浴びる。
世代、時間、国境を超えて。



「音」は空気を震わせ「音」によって生まれるのだという。同様に音は人間の心なる「何か」をも震わせ、ときにそれを感じと呼んだりするのだろっ。

詩人バイロンは、「草のそよぎにも、小川のせせらぎにも、人もし耳を持たばそこに音楽がある」と言っただけで、人間が他の動物と大きく違うのはさまざまな音を意識し、音楽なるものとして昇華し、それらを五感で楽しむことができるということだ。

「聴く」という行為にとどまらず、創造し、見て、伝え、「ミニコンサート」ときには他の文化へと派生していく「音」。そうした「音文化」にスポットをあてておとどけるのが、今年の『文化のクロスロード』である。題して『おとみち』。この響きから、果たしてあなたはどんな音世界を想像するだろうか。

『おとみち』は、8月の3日間、日替わりで開催される。伝統に根ざし、伝承されてゆく音と、ストリートから生まれたミックス・カルチャーとしての音、さらには世界の共通語としての音と。二日ワンコイン、500円で楽しむ、参加型エンタテイメント。世代、時間、国境を超えた「音」の魅力、それが内なる「何か」を震わせる。そんな瞬間に出会えるかもしれない。

★ グランシップ開館5周年記念事業
文化のクロスロード2004

おとみち
otemichi

8/20fri・21sat・22sun

グランシップ 大ホール・海

1日¥500 (1日1COINでいつでも好きな時間に入場OK!)

主催 / (財)静岡県文化財団 共催 / (財)静岡県国際交流協会 後援 / 静岡県・静岡県教育委員会・K-MIX

日本人のDNAが求める、
その魂に語りかける「音」がある。

さまざまな音が輻輳する現代とは異なり、昔は、そこにある音がすべてだった。その音は土地に根ざした波動を持ち、まるで御神木のような、スプリチュアルな響きをもつて、そこに生きる人々の魂に語りかけてきたのだ。

現代の音、西洋の音をためらいもなく享受しながらも、我々のDNAは、どこかで古来伝承の音を求めているのだろっ。だから、祭り囃子に血が騒いだり、太鼓の響きに魂が揺さぶられたり…。

『おとみち』初日は、そんな伝統の「音」が大ホールに集結。古代の舞楽に始まり、中世の田遊び、近世の祭礼…。さらに

は鬼太鼓座のステージをはじめ、静岡に息づくさまざまな太鼓は、見もの、聞きもの。今どき「茶髪に三味線」は特別ではないが、伝統の音とは、ある意味で特別なもの。だからこそ、その特別な音宇宙に魂を預けてみる。そんな趣向が興味深い。



写真提供：静岡県立修善寺工業高等学校

1st day
ザ・伝統
8/20fri

開場PM2:00 開演PM3:00

受け継がれる伝統のリズム

- 天宮神社の十二段舞楽獅子(森町)
- 滝沢の田遊び(藤枝市)
- 三社祭礼囃子(横須賀町)
- 天城連峰太鼓(伊豆市)
- 金谷大井川川越し太鼓(金谷町)
- 少女和太鼓「魁鼓KAIKO・500」(浜松市)

バンブーオーケストラ
ワークショップ

竹の楽器づくり+体感ステージ+スペシャルライブのセットでワークショップを体験!

鬼太鼓座スペシャルステージ
おとみちバージョン

和太鼓の迫力・魅力が大ホールを満たす!

同時開催

県内有名地場産品の大大市場!
ふるさと物産展
PM3:00 ~ PM8:00

2nd day Beat Beat Street

8/2 1sat

開場PM2:00 開演PM3:00

チームのプライドを賭けたダンスパフォーマンス!!
DANCE SHOW CASE

クールなクラブバンドが続々登場!
ストリートミュージックステージ

- G-PRIDE
- Jam-9
- SOUL BLOODS

メガダンスコラボレーション
THE SPARTANIC ROCKERS 出演!
スペシャルセッション

フロア
イベント

これぞ、ヒップなストリートカルチャー。
ストリートファッションアベニュー

PM3:00 ~ PM8:00

ネイルアート、ファッション満載のストリート出現!

巷の音楽シーンでは、「ヒップホップ」はラップ・ミュージックと同意語としてされている向きもあるが、そもそもは音楽に限らず、絵画やファッション、ダンス、文学にいたる、NY黒人居住区に端を発するカルチャーシーン、すなわちアフロ・アメリカンが創造した文化そのものである。そこで2日目は、ヒップホップをテーマにダンスやファッションなどを含めた、ミックス・カルチャーとしての「音」を発信、ダンスバトルあり、クラブバンドのライブあり。そしてストリートファッションやネイルアートなど、ライフ・エッセンスも満載。クラ イマックスは、「ザ・スバルタック・ロツカーズ」によるエキシビジョンショーと、さらにはオール・オー・ディエンスとともにダンスを楽しむという仕掛けもあり。

地元ヒップホップ通なら思わずニヤリ!の顔ぶれが揃つ、この日。気軽に「YO!」とぞびてみよう。

YO!YO! ヒップホップをピックアップ。
ショーアップでヒートアップ!



音楽は、翻訳のいらない言葉だ。
世界のリズムを体感しよう。

ワールド・リズム・フェスタ

音楽は国境を越える!グローバルミュージック
世界の音楽ショーケース

- グルーヴィー ジャズ オーケストラ(サルサ/アメリカ)
- ナレス・マハラジャンとディリブ・マハラジャン
(舞踊&民謡音楽/ネパール)
- 琉神(エイサー/沖縄)
- サンバ・エストレーラ(サンバ/ブラジル)

全身でリズムを感じよう!
アフリカンダンス・ワークショップ

民族打楽器を楽しみながら体験しよう。

おとみち2004ファイナル

- おとみちGROOVE EARTH

同時
開催

おいしさ、楽しさグローバル!
ワールドバザール

PM2:00 ~ PM8:00

今日も地球上のさまざまな場所で音楽は生まれている。それらはそれぞれの民族の言葉でありながら、翻訳を必要としない、世界の共通言語でもある。

3日間にわたる『おとみち』の最終日は、世界のリズムを集めたワールド・リズムムニエスタ。静岡県在住の外国人を中心におくる「世界の音楽ショーケース」では、サルサやマンボから、ネパール舞踊、沖縄のエイサーまで、民族楽器の魅力が楽しめる。また、世界的ブームを呼んでいるア

フリカンダンスのワークショップも開催。ジエンベなど民族打楽器を打ち鳴らし、リズムを感じるままに踊る快感をぜひ体験したいところだ。

そして、フィナーレは地元静岡で結成の無国籍バンド「おとみちGROOVE EARTH」のライブにはじまり、ワールドワイドなゲストが揃い、会場中を巻き込んだダンス・セッション。リズムの魅力がとことん全身で味わえる。



グランシップ
2004
夏!
スペシャル

『Sing』今年のグランプリは!? 5周年を記念して、特別企画展も。

『Sing』の施設、メディアを活用した、自由な発想を支援する『Sing』。5年目を迎えた今年は、空間プロデュース 映像 + 音楽 テレビ番組セットの3つのカテゴリーでの企画案を募集したところ、全国から多数の作品が寄せられた。果たしてグランプリに輝く作品とは、どのようなものなのか! は、とりあえず8月9日の発表をお楽しみに。

また、今年はグランシップの開館5周年を記念して、『グランプリ作品展』開催にあわせ、特別エキジビション『色のむこうがわ展』も開かれる。アーティストであり、『Sing』では毎回審査員を務める日比野克彦をはじめ、写真家の田村尚子ら、映像、写真、デザインなど、さまざまなジャンルで活躍のアーティストが参加。「色」をテーマにグランシップ館内でさまざまな試みを展開。真夏のグランシップがアートに色づく。

Sing 2004 空間プロデュースグランプリ作品展

8/9 mon ~ 8/22 sun

入場
無料

5回目となる今年のグランプリ作品を一堂に展示。ぜひ、お楽しみに。

■ Sing 2004 受賞作品発表 & 表彰式

8/9 mon ~ 8/22 sun

各ジャンルで活躍のアーティストによる特別エキジビション。
色 カラー をテーマにグランシップの空間とコラボレーション。
グランシップでしか見られない、アートな宇宙が出現する。

【参加アーティスト】

日比野克彦、田村尚子、田村香織、熊坂出、ED-Style

同時開催
色のむこうがわ展



日比野克彦

■ 日比野克彦

アーティスト。パリ、ブリュッセルなど国内外で個展・グループ展を多数開催する他、絵画、立体作品、商品デザイン、舞台美術、映像、映画、パフォーマンスなど、多岐にわたり活動。
本展では、色を超越した作品「日比野色」を発表。

■ 熊坂 出

映像ディレクター。映像ディレクターとして、スポットムービー、ミュージッククリップ等演出作品多数。
本展では、「黒」色の作品を発表。

■ 田村尚子

写真家。京都、東京、フランスで個展を開催。99年から国内外の演出家やパフォーマンス・アーツを多く撮影。今年の2月には、初写真集『voice』(青幻舎)を刊行。
本展では「橙」色の作品を発表。

■ 田野慶太

映像作家。バンクーバー、プリズベンなど海外の国際映画祭で映像作品を発表。国内では、映像を基盤として、映画、テレビ、舞台映像など、映像ジャンルを網羅する活動を続けている。
本展では「青」色の作品を発表。

■ 田村香織

クリエイティブ作家。テレビ番組、ミュージッククリップ等でアニメーションを制作。
本展では「赤」色の作品を発表。

■ ED-Style

制作集団。竹と和紙で制作した行灯での空間インスタレーションを中心に、京都を拠点に活動。Sing2002(主催:静岡県文化財団)でグランプリを受賞し、2002年12月、グランシップ広場に巨大行灯による灯の空間を出現させた。以後、各地でワークショップや音楽イベント、TV番組等の空間演出を行い、2004年5月には各メンバーが追及する素材やテーマを形にした「モノ」を「ED-Style PRODUCTS」として発表し、その活動の幅を広げている。
本展では「黄」「緑」「紫」色の作品を発表。

文化のクロスロード2004
しずおか演劇祭実験劇場TRY 03

天守物語

チケット
発売中

9/22 wed. PM6:00開場 PM7:00開演

9/23 Thu. Holiday

PM12:30開場 PM13:30開演 PM6:00開場 PM7:00開演

9/24 Fri. PM6:00開場 PM7:00開演

グランシップ 中ホール・大地

全席自由 一般 前売1,800円(当日2,000円) 高校生以下 前売1,500円(当日1,700円)

障害者と健常者がともにつくりあげる、妖しく美しい幻想の世界。天守に棲む美しい妖怪の姫の物語、泉鏡花の戯曲「天守物語」を上演する。



前回の泉鏡花作品より



親子で学ぶサイエンススクール 飛行機の科学 ～大空への挑戦～

8/1(日) PM1:30開場 PM2:00開演 **チケット発売中**

■ 会議ホール・風

■ 全席自由 500円(教材付・税込)*小学生以上対象

ライト兄弟が動力飛行に成功してから1世紀。今回は、「空を飛ぶ」ことを夢見た人々の話をはじめ、飛行の不思議を実験やクイズを通して解説。講師には毎年、子どもの目線で科学の楽しさをひとくち中村浩美。ゲスト講師に各国の飛行機撮影で知られる徳永克彦を招いて、飛行機の魅力を紹介する。

【講師】中村浩美(航空評論家・科学ジャーナリスト)

徳永克彦(写真家)

【司会】薄羽美江

徳永 克彦 / DACT,INC.



夏休み自由研究にもピッタリ!
20世紀最大の発明「飛行機」に迫る!



中村浩美



徳永克彦



薄羽美江

子どもたちは、どんな世界の扉も開けられる
好奇心というカギを使って。

教育学者、ユイの「子どもたちは活動する瞬間、自らを個性化する」の名言然り。どんなに暑い日も、子どもたちは二瞬たりともじっとしていない。子どもは子どもの目で面白い何かを探し、遊びの中で学び、興味を二層ふくらませてゆくのだ。せいかくの夏休み、家族旅行もいけれど、子どもならではの無垢な好奇心に視線をあてて、科学や文学、創造の世界に連れだしてあげると、いつもの手だ。たとえ電車や飛行機に乗

らなくても、空想の扉を開いてどこへでも自由に行ける。それが子どもの特権なのだから。この夏のグランシップでは、毎年恒例の「サイエンススクール」をはじめ、演劇やキャラクターショーなど、小さな子どもから、小学生、中高年生までが楽しめるメニューをラインナップ。好奇心というカギを使って開けた、その扉の向こうに広がる世界。そこで夏休み最高の思い出に出会えたら、うれしい。

子供のためのシェイクスピア 「ハムレット」

8/11(水) PM1:00開場 PM1:30開演

■ 中ホール・大地

■ 全席指定(税込) S席3,000円 A席2,500円

学生(高校生以下) S席1,000円 学生A席800円 *小学生以上対象

子どものためのシェイクスピアカンパニー(旧グローブ座カンパニー)は、その名の通り、シェイクスピア作品の普及を基本方針に、本筋を変えず2時間程度にまとめた大胆な構成、遊び心いっぱいの演出で知られる劇団。今年は、シェイクスピア四大悲劇の一つ「ハムレット」を上演。わかりやすく質の高い内容で、まさに家族で楽しめる。

【脚本・演出】山崎清介

【出演】植本潤、岡まゆみ、福井貴一、ほか

出演者によるワークショップ

■ 8/10(火) PM2:00 ~

■ B1Fリハーサル室

■ 小学校4年生~6年生対象

■ 定員25名

■ 要電話申込(静岡県文化財団TEL054-203-5714)

参加
無料

岡 まゆみ



植本 潤



シェイクスピアの四大悲劇だって、
わかりやすく、楽しめる!

● あらすじ / 19世紀のデンマーク王国。急死した国王の亡霊から弟クローディアスに毒殺されたと聞いた王子ハムレットは、クローディアスの忠臣の娘オフィーリアと別れ、復讐を誓う。オフィーリアは悲しみの余り絶命。クローディアスはハムレットを追放し、暗殺を指示。しかし、オフィーリアの葬儀に死んだはずのハムレットが現れる。ハムレットはクローディアスを殺し、自らも毒剣によって息絶える。

鉄道模型のイベントには、日本一の会場。

河村 正幸（静岡HOKクラブ代表）

「グランドシップ・トレインフェスタ2004」実行委員長



毎年恒例の「トレインフェスタ」も、初年度こそ静岡HOKクラブの単独開催でしたが、全国各地から参加を得るようになって今年で五回目。年々来場者も増え「今年はいつ？」と開催を毎年楽しみにしてくださるリピーターの方が多いといつのは、本当に嬉しい限りです。しかし、このイベントを誰よりも楽しみにしているのは、実は私たちのほうなのかもしれません。

なにしろこれだけ条件の整った会場で鉄道趣味の楽しさをアピールできる機会というのは、そうそうあるものではありませんからね。先日、関東地区でこうしたイベントが開かれましたが、まず会場探しが必要だけれども、料金的なことやアクセスの問題もある。その点、グランドシップはスペース的に申し分なく立地・アクセスにしてみれば、

想的でしょう。とくに隣接する駅があるのは、鉄道ファンには嬉しいこと。さらに大ホールと広場をつなげたり、今回のようにほぼ全館を使った提案もできますからね。日本では、年に二〜三回、鉄道模型の大きなイベントが行われていますが、その中でもグランドシップの「トレインフェスタ」は最大級。我々にとっても、お客さんにとっても、最高の場だと思っています。

遊

オロナミンCプレゼンツ 仮面ライダー スーパーライブ2004

封印せよ！ブレイド最強バトル

8/15(日) AM10:00開場 AM11:00開演
PM1:30開場 PM2:30開演

■大ホール・海
■全席指定(税込) S席3,000円 A席2,500円
B席2,000円 *3歳未満膝上鑑賞無料

チケット
発売中

スピードのエースのカードで変身する新ヒーロー「仮面ライダーブレイド」と、「1号」「V3」「龍騎」「カイザ」「ファイズ」「カリス」「ギャレン」ら、歴代ライダーたちがグランシップに登場。今、壮絶な戦いの幕が開く！



石原プロ・テレビ静岡・ADK・東映

歴代ヒーローたちも大集結！
究極のスーパー・バトルが始まる！

うたのおねえさん、
おにいさんもやってくる！



NHK・NHKエデュケーションal

おかあさんといっしょ ぐーちょコランタンがやってきた

8/17(火) PM12:00開場 PM1:00開演
PM2:45開場 PM3:30開演

■大ホール・海
■全席指定(税込) S席2,000円 A席1,800円

チケット
発売中

NHK教育テレビでおなじみの「おかあさんといっしょ」のキャラクター「ぐーちょコランタン」がやってくる。「うたのお姉さん」瀧本瞳、「うたのお兄さん」坂田おさむとともに繰り広げる、スー、アネム、ズズ、ジャコビの4人組の夢と冒険の物語をご家族と一緒に。



うたのお姉さん
瀧本 瞳

うたのお兄さん
坂田おさむ

何必館・京都現代美術館所蔵
「世界写真家シリーズ」開催記念対談

(財)静岡県文化財団 グランシップ館長

山本 肇

対談

梶川 芳友

(財)何必館・京都現代美術館館長

京都の祇園にある〈何必館^{かひつかん}〉は、村上華岳や山口薫、北大路魯山人などの作品の所蔵で知られる、凛と美しい美術館である。一方、カルティエ・ブレッソンやド・アノー、荒木経惟といった写真家たちの作品紹介でも異彩を放ち、今や写真界でここを知らない人はいないといわれるほどだ。さて、グランシップでは、その〈何必館〉の協力を得て、今秋「アンリ・カルティエ・ブレッソン展」が開かれることとなった。以降、三年連続、三回シリーズで世界の写真家を紹介していくことを予定している。これを記念し、山本肇・グランシップ館長が〈何必館〉の設計者であり、館長でもある梶川芳友氏を初夏の京都に訪ねた。

何必館・京都現代美術館「世界写真家シリーズ」
2004.10/9～24 アンリ・カルティエ・ブレッソン展
2005 ロベール・ド・アノー展
2006 ウィリー・ロニ展
グランシップ 6階展示ギャラリーで開催予定



山本 肇
Hajime Yamamoto
グランシップ館長

写真とは、瞬間のもの。

山本… 今回の展覧会については、実は四年ほど前に静岡県出身の写真家、大竹省二さんから、カルティエ・ブレッソンの写真展を企画してみたらどうかという話がまずあつたんですね。それで私としてもその企画をどう実現させたいのかと考えていたところ、東大寺の大仏殿で梶川さんとお会いした。その後、何必館に来るようになり、ここで以前、アンリ・カルティエ・

「ドアノイは、フランスの庶民に非常に愛され、親しまれた写真家ですね」 山本

ブレッソン展を開催し、多くの作品を収蔵してらっしゃるということがわ



かった。これはもう何かの縁だと思つて、梶川さんに今回の企画のお話をしたというわけです。

梶川… ヨーヨー・マンの演奏会でした。

山本… あれから三年経ちますが、こういう形で実現することを本当に嬉しく思っています。ところで梶川さんはどのようなきっかけから、ブレッソンの作品を収蔵するようになったのでしょうか。実際に本人に会われているとお聞きしていますが。

梶川… 実はずっと前から、何必館・京都現代美術館の中で写真の部門を確立したいなと思っていたんですね。世界というものを視野に置いたとき、ここから何か世界にアピールできること、それは写真の部門ではないかと。そうして考えていくと、あらゆる意味において、カルティエ・ブレッソンがスタートになるのではないかと思つたわけです。なにしろ世界中の写真家の中で、ブレッソンに影響を受けてない写真家というのはほとんどいませんから。それで二十年ほど前でしょうか。あるとき、パリに滞在していましたら、「ロベール・ドアノイに会わないか」という話が突然飛び込んできたわけです。ドアノイは僕が十代の頃から名前を知っている人ですから、「ドアノイって、まだ生きてるの?」って。(笑)

山本… 思いますよね。一九二二年の生まれですから。

梶川… 僕はね、中学生のときには学校の写真部だったんですよ。

山本… へえ。それは初耳ですね。

梶川… 小さい頃からのドアノイに対する思いもあり、パリで会つたんです。すると僕が長年芸術家たちに望んでいることを画家ではなく、写真家であるドアノイにもすくなく感じましたね。本当に目に見えないようなものをもらいました。それで恩返しをしたいと、日本で初めての写真展と、できれば「レクシオン」を日本に残してあげたいと思つたんです。

山本… ドアノイは、フランスの庶民に非常に愛され、親しまれた写真家ですよ。

梶川… そうなんです。待ち合わせをして、レストランまで街を歩いていきますと、飲み屋のお兄ちゃんから八百屋のおばさんまで、彼に声をかけるわけです。ドアノイのほつもフィルムが入っているかどうかはわからないけれど、その人の前に行つてカシャッと押してやる。「街の写真屋さん」という感じですよ。

山本… ブレッソンとは、そのドアノイの紹介でお会いになるわけですか?

梶川… ドアノイは冗談ばかり言っていました。パリの知性」というかなかなかの人で、ブレッソンはそれを一番よく知っていた友人でしょう。私のことはおそらくドアノイから聞いていたんでしょうね。ドアノイが亡くなつた後、ブレッソンから突然手紙が来たらんです。「一度パリに来ませんか」と。七、八年ぐらい前ですね。ル・ブル美術館の向かい側、リヴオリ通りのヌル



何必館・京都現代美術館

Kahitsukan・Kyoto Museum of Contemporary Art

館長である梶川氏が自ら設計。地下1階、地上5階建の館内には村上華岳、山口薫、北大路魯山人の作品室が設けられ、5階には茶室と自然光が入る坪庭が配されている。年に約2回特別企画展を開催。

京都市東山区祇園町北側271 TEL075(525)1311 ■開館時間/AM10:00~PM5:30 ■休館日/月曜日、年末年始、企画展準備期間 ■入館料/一般1,000円 学生800円



梶川芳友

Yoshitomo Kajikawa
何必館・京都現代美術館館長。
村上華岳の一枚の絵「太子樹下
下禅那」との出会いにより、美
術の道に入る。'80年、財団法
人京都現代美術財団設立、理
事長となる。'81年、何必館・京
都現代美術館創設、館長とな
り現在に至る。富山県芸術文
化顧問、日本ペンクラブ会員。
1941年京都市生まれ。



外観



エントランス



光庭(5階)

リー公園が眼下に見えるアパートで、
パリで一番古いエレベーターで上がって
いくと、エレベーター前でブレスンが
出迎えてくれましたよ。かつて三階に
セザンヌ、四階にマネがいて、それで今
五階に自分がいると言う。私が、上
に行くほど悪くなる」と言ったら喜んで
ね。(笑)結局、その機会に二二〇点選
択し帰ってきました。

山本…その場で選んで？

梶川…そう。一週間程の滞在でね。
オリジナルもモダンプリントもあつて、
その中から自由に選べど。しかも一枚
ずつブレスンが自分で目の前に持って
くるの。それでイスがノーが即座に
答えろと。

山本…それは厳しい。

梶川…写真は瞬間だから、瞬間にわ
かると。

山本…なるほど。

梶川…もう丸裸ですよ。二、三千点
ありましたが、うちにはせいぜい百数
十点とっていましたから、大半は

「ダメ」と言わなくちゃならない。「いい
ですね」は言いやすいけれど、本人に
向かって「いやこれはよくない」とは言
いにくい。それを言うためには、自分
にしっかりとした考え、ものさしを
持つていないといけません。つまりブ
レスンは、それは違う」という答え
が正解であるという、そういう問いの
仕方をするんですね。サラ・ムーンが
彼を撮ったドキュメンタリーのタイトル
に「疑問符」とありますがブレスン
という人は知れば知るほどわからな
くなる。「本当に
そつなの？」と。
これが「何必」
なんです。学問
でも、芸術でも、
人は定説に縛られ、自由を失ってしま
う。定説を「何ぞ、必ずしも」と疑う
自由の精神を持ち続けたいという願
いがこの美術館のテーマなんです。
疑問を持つということが、一番大事な
ことなのです。

「ブレスンは、一瞬にして物事を見抜き、
構成できる眼を持った人です」 梶川

事変の真意を認識する力と、
瞬時の造形力。

山本…ブレスンの写真の魅力は、一
言で言つとするとするならば、何だと思わ
れますか。

梶川…それはスバ抜けた感性と造形力
をもった人であると。ブレスンの写真
は全部ノトリミングなんです。

山本…そうなんですよな。

梶川…たとえば、中国最後の王朝の宦
官を撮った写真がありますね。紫禁

城の横ですれ違って、振り返って撮って
いる。もしもあの屋根のあそこが欠
けてたら…、道が、物が、影が…と考
えていくと、あの瞬間的な造形力、構
成力。それは天才だと思っんですね。
それと事件や事変に出くわして、そ

の本体というか、それがどういつことなのかを瞬時に認識する凄さ。この二つですね。

山本…ブレッソンは最初、絵描きを志した人ですから、そうした画面構成

「世界中の事変のあるとき、必ず現場に立ち会っている。

それはもう不思議なくらいに」 梶川

に絵画的な訓練が表れたのかもしれないですね。

梶川…そういうこともあるんでしょうけれども、やっぱりあれは…。

山本…天才、ですか。

梶川…生まれながらのものでしょうね。

山本…ブレッソンの写真集の中の「セージ」に「写真が私にとって、一瞬とその永遠をとらえる視角への関心の自発的な衝動である」とありますけれども、一瞬の中に永遠をつかまえ

「ガンジー暗殺も、中華人民共和国に変わるときにも、ブレッソンはそこにいましたよね」 山本

たいといつ、その気持ちが凄いなと思うんです。

梶川…そうですね。ただ、その事柄の一瞬はそこにあるけれども、それが永遠になりうるかどうかは本体の認識



2004年5月14日 何必館・京都現代美術館にて

次第なわけです。そのところがなかなかつきつめられない。誰でも写真は撮れる。あるいはもう少し突っ込んでその一瞬はとらえられるけれども、そのことの認識がどこまであるかが問題ですね。この写真集のタイトルには「決定的瞬間」とありますよね。でも、これは英語に訳された言葉であって、もともとフランス語の直訳は、すり抜けていく映像。『決定的瞬間』ではないんです。今だと思ったときには今じゃないと。とても禅的というか。

山本…アメリカで訳されるときに「The Decisive Moment」と訳されてしまったわけですね。アメリカとい

えばブレッソンは戦後間もなくロバート・キャパらと「マグナム」を結成して、いわば写真の権利について努力しますよね。フォト・ジャーナリズムみたいなところに身を置いて。私も長い間ジャーナリズムの世界にいましたから、その感覚はよくわかるんです。でも、彼の写真を見ると、単なるジャーナリズムだけではなくて、そこを突き抜けた芸術性を感じるんですね。

梶川…それがまさに起っている本体というか、真意というか、その認識に裏打ちされた構力だという気がするんですね。画面の端々にあるモノによって、全体の真意が言えるということがあるんだと思いますよ。全然関係がなさそうに思えますけれど、北大路魯山人が（芸術は）当意即妙の連続である」と言ってるんです。平たく言えば、臨機応変。一瞬で見抜く、その力が大切なんですね。見えるから、造形がある。だから、トリミングしなくていい。しかもブレッソンは、世界中の事変のある現場に必ず現れるんですよ。それはもう不思議なくらいに。

山本…ガンジーが暗殺されるときも、中国が国民政府から中華人民共和国に変わるときにも、彼はそこにいましたよね。

梶川…メキシコ、パキスタン、スペイン動乱もそうですね。もはや運がいいとか、そういうことだけじゃない。

山本…勘なんじゃないかね。



アンリ・カルティエ＝ブレッソン

Henri Cartier-Bresson

1908年パリ郊外に生まれ、キュビズムやシュールリアリズムの影響を受け、絵を描くが、アフリカを彷徨した直後の32年にライカを手に入れ、完璧な構図を持つノンフィクション写真を確立するなど、20世紀写真史に偉大な業績を残す。'52年出版の写真集タイトルになった「決定的瞬間(The Decisive Moment)」は有名。

アンリ・カルティエ＝ブレッソン
St-Lazare Station, Paris 1932
HENRI CARTIER-BRESSON / MAGNUM PHOTOS



ロベール・ドアノー

Robert Doisneau

1912年、パリ郊外に生まれ、石版彫刻師として働くが、写真に転向し、ルポルタージュを撮る。'34年、自動車会社「ルノー」の広告写真を担当。'39年、写真通信社「アジャンス・ラフォ」の創始者シャルル・ラドと出会い、パリの巷の写真を撮り始める。'46年、「アジャンス・ラフォ」に参加。'94年、没

ロベール・ドアノー
Les pains de Picasso 1952
Robert Doisneau/RAPHO



ウィリー・ロニ

Willy Ronis

1910年パリ生まれ。音楽家の夢を断念し、親の写真館を引き継ぐ。20代でデビッド・シーモアやロバート・キャパと親交を重ね、'47年コダック賞、'57年ヴェニス・ビエンナーレ金賞受賞。'81年写真集「偶然の糸を手繰って」でナダール賞受賞。'89年レジオン・ドヌール勲章受勲。'95年文化功労受勲者となる。

ウィリー・ロニ
Fondamenta nuvole, Venice 1959
Willy Ronis

三人の写真に見る、時代の発言。

梶川…「匂いがする」と言っていましたね。でもね、ネットワークとしてはかなりあるみたいですよ。

山本…そこはやはり非常にジャーナリスティックな鼻を利かせた行動をしていますよね。

梶川…写真は現場に立ち会わないと撮れない。そして、ただの報道としてだけではなく、いわば芸術の領域におかれても耐えうる画面が作れる。それがブレッソンなんですね。

山本…日本の写真家もブレッソンの影響を非常に受けていると思うんですけど。

梶川…それまで写真というものは、道具が必要だったわけですね。そこへライカという手持ちカメラが出てきた。ブレッソンは終生ライカでしたからね。それを持ち歩くことにより、今まで伝えられなかったこと、ナマのものというか、生きているというか。

山本…木村伊兵衛の写真などは、本当にそうですよ。自然な感じでパチ、パチと。

梶川…確実にそうです。木村伊兵衛はそれまでは大きな箱カメラで、要するに写真館という感じでしたから。彼はツェッペリン号の気球の船長がライカのカメラを胸に下げているのを見て、あんなカメラがあるのかと。

山本…それですぐに買ったんですよ。

梶川…自分の持っているカメラを全部売ってね。でも、実際のところは、伊奈信男が持ってきた二十枚くらいのブレッソンの写真の展覧会があって、木村伊兵衛はそれを見て、自分の考えを一変するんですね。それでブレッソンにどうしても会いたくなって、あちらに行くんですけれど。

山本…そうだったんですか。さて、私もグランシップでは、今年「ブレッソン展」をやらせていただいた後、来年はロベール・ドアノー、その次はウィリー・ロニと、三年計画で考えているわけですけど、この三人の特長といますと？

梶川…一番年長はブレッソンですが、二歳ずつしか離れていないんですね。この三人は、世界におけるヒューマン派。私はそう呼んでいるのですが、その中心にドアノーがいるのです。ブレッソンとドアノーはものすごく親しい。ドアノーとロニも親しい。けれど、ブレッソンとロニは会ったことがなかった。でも、仕事は全部見てきているし、よく知ってる。それでこの二人は三年前のアルルの写真フェスティバルで初めて会ったんです。お互い九十歳を越してから、というのが驚きですよ。(笑)ロニは市井の人で、非常に真摯な人です。事務所を訪ねるときちと迎えてきちと話をします。豊饒としてますよ。僕は三人にそれぞれ会ってるわけですが、ブレッソンは自宅で食事を

ご馳走してくれました。ドアノーとはヴァンドーム広場のレストランで食事をしました。そしてロニは職人街であるベルヴィルの小さい食堂で、彼のための定食メニューを食べました。

山本…まさに三者三様ですね。

梶川…そう。まったく同年代でも全然違う。でも、僕がその三人に会えて本当によかったと思うのは、その世代を通しての発言というのが、それを写真の中に見ることができたということですね。今、一番ないのがそれのような気がします。とくに日本は食べるころも、遊ぶころも、若い人が中心なんですね。経済効率からいうと、その分野が一番大きいからだというけれども、でも、本当の意味でのその世代の発言というものが、ないことには、成熟した社会にはならないような気がするんです。すぐに迎合してしまふ。だけど、今の若い人たちの行動のなかで、我々が理解できないことがあつて当たり前なわけですよ。「まったく理解できない」というのが、僕は正しい考えのような気がするんです。三人の中には、この時代の人の発言というものがあつて、さらにそれぞれの表現があると思いますよ。それが今度の展覧会を通して、感じていただければと思いますけれど。

山本…本当にそうです。お話をうかがって、ますます楽しみになりました。今日はどうもありがとうございました。

深瀬

サキ

肉体で書くリズム。

「私はこれを書くには、自分の肉体を信じるより
しつがなうと思つたんです。」

そもそも私は頭でものを書きたいと思つたことはないですよ。
肉体で書く。身体が知つてゐることが
言葉になつて出てくるまでは何もできないんです」

肉体のリズム。

千利休を評して『自然の人』という。しかし、彼女もまた『自然の人』だ。その舞台を思い描き、そのときその場に感じたこと、その自然を待つ。そして、信じるものは、言葉よりも肉体——。そんな深瀬サキさんが詞章を手掛ける新作『利休』が、この秋、グランシップで上演される。自然なる心で創造の更新を求めた茶匠の一説。演者の肉体を通して放たれる言葉、三間四方の舞台の上に広がる能世界に、今からもう期待は膨らむばかりだ。

——お能の詞章を手がけられるのは、本作で何本目になるのでしょうか。

「これまで上演されましたのは、『紫上』一本

だけなんです。『大津皇子』が今回と同じくシテに観世流のご宗家をお迎えして、来年上演されると聞いておりますけれども」

——ご自身では、伝統芸能としてのお能の楽しみは、どこにあると思われませんか。

「実は観世寿夫さんとはお友だちで、そんな縁で若いときからお能は観ていたんです。ただ、その頃は子育てに疲れておりまして、たから、ボンという鼓の心地よい音を聴きますと、眠くなったりして（笑）お能の動きは本当にゆくりしています。その中で少しずつ表情を違えています。そういう肉体の自然な動きというのはダンスの表現と似ていますね。西洋のダンスは上に飛びますが、日本のお能などは、地に潜むような力タチで本当にゆくり。初めは何となく見ていても、そのうちにめまいがするような感じで引き込まれていくんですね。たとえば、『芭蕉』などはほとんど動きません。けれども、表情は動いている。本当に幽かな細かい動きですけれど、動きを感じさせないで、それでいて女の人の深い内面の表情を出してきますので、片方では眠くなりながら、片方では何かクセになる。お能にはそういうところがありますね」

——戯曲を書かれる場合と詞章とは、その手法というものはまったく違うものなのでしょうか。

「お能の詞章は、せいぜい原稿用紙十枚ほどですから、まったく違うといえは違うのでしょうけれど、でも、私の場合、詞章も戯曲の感覚で書いているのかもしれないですね。物を書くといえども、私などは時間的に

は非常に限られているわけです。書いていいフレーズが浮かんだとしても、そのときご飯の支度をしなければならぬのなら、ピタッと書くのをやめる。それで忘れたい忘れたい、それは縁のない言葉だと思ったわけなんです。むしろ言葉にはあまりこだわらない。舞台を自分の頭の中で想定して、そのときその場で感じたこと、その自然を待ちますね。ですから、どうしてもこうでなければ、ということがほとんどないんです。團十郎さんとやったお芝居（板東修羅縁起譚）でもそうでした。歌舞伎の方というのは、自分たちの知っていることはよくできるんですけれども、新作となると覚えにくい。もちろん團十郎さんなどは、すぐに頭に入れてくださいますけれど、お歳の召した方はね（笑）そうすると、その場でひと言ふた言にしなくてはならない。そういう作業は、劇に支障がない限り、かまわないと思っています。人に伝わる、ということのほうが大切ですからね」

——組立や構成についてはいかがですか。お能などには独特の決まりごとがあるようですが。

「私などは古典の芝居を書くなんて思っています。主役がまず頭に浮かびます。でも、歌舞伎などでは、主役を最初にもってきてはいけないといふんです。まず、脇の人をいばい登場させて、それから主役がお出ましになると。お能でも最初に地謡を書いたら、それはダメなんです。地謡は待つて、待つて、高揚したときに歌い出さないと歌えないもんだと。あらら、と思つてことば

かりでした」

——著書のとがきに、『言葉のリズムを尊重することに常に意を用いて……』とありますが、戯曲とはまた趣の違う、お能の詞章のリズムというものをどのように受けとめていらっしゃるのでしょうか。



1993年発表の処女戯曲集『思い出の則天武后』。タイトル作品の他、『妃殿下』『則天武后』『火の雫』『板東修羅縁起譚』などが収められている。

「私にとって、お能の言葉のリズムというのは、わりあい身体と自然なものでした。それはきつとお能をやる方にきちんとした肉体的力タチがあるからだと思つて、いわゆる台詞だけで、言葉だけで……というのはなくて、それぞれの肉体を通してやるという

ところに負うところが大きい。戯曲にしろ、詞章にしろ、芝居といふものはやはり言葉そのものよりも肉体的リズムであるという気がします。そういう意味で私は自分の言葉にこだわらないと言つてます」

ジャコメッティと利休。

——今回の新作能のテーマは『利休』ということですが。

「利休については、通り一遍のことしか知りませんでしたので、今回はいろいろ読みました。利休はほとんど茶室を狭くしていきますね。狭くして、狭くして、でも、人は多く入れていく。そうしたことからは、私はふとアルベルト・ジャコメッティを思い出したんです。彼の、針金のように細い人物の彫刻や絵がありますけれども、なぜかそれを思い出しました。別に利休のあり方が細身に通じるとか、そういうことではないと思いますけれど。ジャコメッティについては、矢内原伊作さんが作品モデルになったり、翻訳したりしたことであつて、一九五〇年、六〇年代から日本でも広く知られるようになったが、それから二〇年くらい経たあるとき、デンマークのルイジアナ美術館に行きました。廊下の先にジャコメッティの作品があつたんですね。それがね、まるで自然なんです。本当に自然。そして、利休という人もやはり自然の人なんです。それでいて非常に前衛的ですね。創作力、創造力というものを自分の中で常に更新していく。と同時に一回限りのことを生涯やり続けた。すなわち利休

【ふいかせ さき】

沼津学園卒業。詩人である大岡信氏と結婚。最初の戯曲『妃殿下』を発表以降、『則天武后』『火の零』『板東修羅縁起譚』『思い出の則天武后』などを発表。『板東修羅縁起譚』は、88年8月市川團十郎自主公演として国立劇場にて上演。戯曲の他に、ラジオドラマ『堀川の姫』、小説『花びら闇』など。近年は、能の詞章を手がけ、『紫上』は新潟県の新津市美術館、国立能楽堂で上演。『大津皇子』も、来年上演が予定されている。30年静岡県沼津市生まれ。



彼女が芝居を書くきっかけになったのは、意外にも舞踊家ジーン・アードマンのダンスだったという。「言葉はわからない。けれど、その言葉のリズムを楽しむうちに、無性に「書きたい!!」と思ったんです」

は芸術家であり、その天才なんです。死ぬときにまさかど命乞いしなかつたのは、最期まで彼が自分自身であつたからなんだと思います。だからこそ、お茶というものが現代まで生き続けてこれたんじゃないかしら。カタチになつたら、おしまいですからね」

書いているときは、自分が一体何を書いているのかわからなかつた。でも、私はこれを書くために多くのことを頭の中に入れてきましたから、自分の肉体を信じるよりしつがなれないと思つたんです。そもそも私は頭でものを書きたいと思つたことはないんですよ。肉体で書く。だから、物を書くのは頭ではなく腕だ、なんて言つてよく笑つてくれます。でも、（笑）やっぱり身体が知つてることが言葉になつて出てくるまでは何もできないんですよ」

「人口に膾炙しているお話ですから、観ている方にもわかりやすいのではないかなと思います。さらにこの一説に理屈をつけるとすれば、利休は朝顔を一輪だけ残すわけですね。一輪だけ残したことを朝顔は恨みに思つて、利休にそれを尋ねるんですけれど、最後に朝顔が気づくことは、結局、切られた朝顔も切られたということ、その一輪と同じようにに伝説となつて後々まで残ると。そういう自在な生け方を利休がしたという話としておさめています。シテである朝顔の精を演じるのは、観世清和ご宗家なんですけれども、似合いますでしょうか？やはりその御仁にあつた役どころ、内容であるということとは大切ですよ。利休は野村四郎さん、地頭に梅若六郎さんと、非常に豪華な顔ぶれが揃いましたね」

「言葉は必要ですけども、どうしてもこの言葉でなければならぬ、一字一句理解しなければダメだということはないような気がします。いちばん大切なのは、人間の肉体ですね。ですから、言葉を理解するということよりも、音楽として言葉を聴いて、ダンスを楽しむ。そういう心持ちでいらつしやるほうがいいんじゃないかな、と思いますけれど」

「言葉は必要ですけども、どうしてもこの言葉でなければならぬ、一字一句理解しなければダメだということはないような気がします。いちばん大切なのは、人間の肉体ですね。ですから、言葉を理解するということよりも、音楽として言葉を聴いて、ダンスを楽しむ。そういう心持ちでいらつしやるほうがいいんじゃないかな、と思いますけれど」

「最大の見どころといえますと？」

「さあ、どうでしょう。やはり最後の場面でしよつか。最後は朝顔と利休が相舞になつてゐるんですけども、相舞つてきれいだから、好きなんです。ただね、この作品を

11/3 水・祝

新作能
「利休」

PM6:00開場 PM6:30開演

グランシップ 中ホール・大地

全席指定(税込)

SS席 10,000円 S席 8,000円 A席 6,000円

出演 / 観世清和(観世流26世宗家)ほか 作・詞章 / 深瀬サキ

演出 / 観世清和・笠井賢一 芸術監督 / 土屋恵一郎

お茶湯の儀:茶道裏千家坐忘斎千宗室家元



昨年、文化勲章を授章された、深瀬氏のご主人、大岡信氏と。大岡氏は、グランシップ開館の年から5年にわたって開催された『しずおか連詩の会』において、毎年さばき手を務められた。